



TITLE:

<批評・紹介>譚注漢書刑法志 内
田智雄譯注

AUTHOR(S):

大庭, 脩

CITATION:

大庭, 脩. <批評・紹介>譚注漢書刑法志 内田智雄譯注. 東洋史研究
1959, 17(4): 517-519

ISSUE DATE:

1959-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/148119>

RIGHT:

り、一六一四年及び一六七八年リスボン發行の「放浪記」と現代ポルトガル語との對譯本を入手することが出来たので、これを左に紹介しよう。

この對譯本の發行者はリスボンの文化交流會と、リオ・デ・ジャネイロのブラジル學生ホーム圖書出版社の兩者であり、對譯者は、Adolfo Casais Monteiro 氏で、刊行は一九五三年である。(部数は明かでないが限定版である)

此書の体裁はクオーター版、日本流に云うと約B五倍版で假綴廿四冊で、一冊は六四頁である。標題は

Peregrinação e Cartas de Fernão Mendes Pinto

で「フェルナン・メンデス・ピントの放浪記と手紙」である。

印刷の体裁は左右兩頁對譯で、タイトル・ページに一六七八年版の原本を複寫し、又各章の冒頭は花大文字で飾り、原本の倂を出している様に思われる。

本書は二部に分け、全二百二十六章であるが、第一部は第一章から第二百二十九章まで、又第二部は百三十章からで、此部は一六一四年の初版本のタイトル・ページを具えているが、第一部は前記の様に一六七八年版のタイトル・ページである。

なお、本書の末尾廿三冊廿四冊は手紙と附録と目録であるが、附録としてはピントの旅行地圖が掲げられ、又挿入された挿繪はグラビア版廿四枚、原色版十二枚で華麗を極め、中數枚には往時の日本風俗を畫いた所謂 *diomo* 即屏風も見られる。

以上が複製されたピント「放浪記」の概要である。

向ポルトガル公使館の指教によると、リスボンの *Livraria Barreira* 書籍發行の英譯附きの「放浪記」*Peregrinações e cartas de*

Fernão Mendes Pinto があるが未だ入手に至らない。

譯注漢書刑法志

内田智雄 譯注

昭和三十三年六月

ハーバード燕京同志社東方法文化講座委員會刊

寫眞五葉 序二頁 凡例二頁

本文八六頁 索引九頁 英文

序・凡例四頁

二千字たらずの當用漢字が制定され、新しい假名づかいが行われている現在、高等學校程度の教育をうけた者には、漱石の作品ですら簡單にはこなし得ないであろう。中國の古典——所謂漢文——の讀解力はもとより、故事・故實等に關する常識などにおよぶまで、甚だ心もとなない能力しか身につけることのできない現状である。こういう教育制度の現状においては、彼等に理解できるように漢文を噛みくだいてやるといふ翻譯・注釋の仕事が、専門家の仕事の中で大きな場所をしめるようになってきている。しかもその譯文は、従來行われてきたような漢文直譯体では五十歩百歩で、この目的を達したとはいひ難い。といつて口語譯にすると、どのていどまで意譯すべきであるかは一概に定めがたく、ここに譯者のはかり知れない苦心が存するのである。本書の譯者も「原文の語調や表現のニュアンスなどを保存しながら、できるだけ正確かつ平易な日本語とし

て譯出することに努められ、「すくなくならぬ苦勞」をされたという。譯者は内田智雄氏を中心に重澤俊郎・西田太一郎・平中苓次・森三樹三郎・守屋美都雄の諸氏で、譯注の原案をもとに共同討論を行い、削除修正を加えて、納得のゆくまで検討し、更に未定稿を「同志社法學」に分載して他の意見をきくという極めて慎重な方法で行われた。その結果、譯者の意圖されたとおり、平易で、しかもよく練られた正確な表現をもつて譯出されており、あの難解な刑法志が、かくも流暢な日本語で讀めるようになったことは、本書の功績としてまず第一に指を屈しなければなるまい。

第二に指を折らなければならぬことは、本書によつて刑法志というものが、我が國で初めて翻譯されたことである。正史の翻譯としては古く史記があり、また近年小竹文夫・武夫兩氏によつて新しく譯出されているし、食貨志の譯注は加藤繁博士や和田清博士等によつて戦前・戦後を通じてなされ、また魏志倭人傳等の日本に關する正史の記載の譯注も石原道博氏等によつて刊行され、東洋史家はもとより、ひろく日本史家や一般讀書人をも益しているのであるが、こと刑法志に關する限りその例を見なかつたのである。ここに「正史の最初の刑法志であり、太古から前漢末までの刑罰や刑法を歴史的に總括したものであつて、爾後の歴代正史の刑法志や刑罰志の先蹤をなす」漢書刑法志が邦譯されたことは、ひとり刑法志のみならず、中國の法史料の翻譯の先蹤をなしたものであつて、東洋史學界もさることながら、法制史學界において刮目すべき事業である。漢書刑法志は、その中に漢時代の法史料がすべて盛り込まれているというものでは決してなく、むしろ具體的な漢代の法史料は刑法志以外に求めなければならぬ場合が多い。漢書刑法志の價值は、具體的な法

史料よりもかえつて法思想の史料に富んでおり、それが中國の傳統的な思想と極めて密接な關係がある點にあらう。そういう點から考へて、譯者の顔ぶれは誠に期待し得る最高のメンバーといふべきで、我々はその譯注に十二分の信頼をおくことができるのである。

第三番目に、本書の特色としてテキストクリティックの問題がある。巻頭に掲げられた五葉の寫眞は、景祐本・湖北提舉茶鹽司刊淳熙本・劉元起刊慶元本・白鷺洲書院刊嘉定本・及び靜嘉堂文庫藏の宋刊元修本の書影であるが、底本は汲古閣本（漢書補注本）とし、前記のうち宋刊元修本を除く四本に南監本と殿本とを加えて七つのテキストの間の異同を明らかにしている。より正しいテキストを得ようとする努力は、學究として當然であるといへばそれまでであるが、地味な校合の仕事は言うは易いがなかなか實行しにくいもので、特に稀覯書上杉家藏の慶元本を始め善本を多く集めてなされた校合は、本書が最初にのべた譯文の平易さを狙つたのとは別に、學問的な高さをめねらつた業績であることを意味し、我々は本書によつて、漢書刑法志の譯注を持つと同時に、その校本をも持ちえた點でも高く評價しなければならない。

本書にはこういう平易で流暢な譯文という啓蒙的な面と、校本を作り、正確な日本語に譯するという學問的な面との両面があるが、その二つの性格がもつ矛盾した面をやや露わした個所を見うける。それはその注釋においてである。例えば高祖以下漢の天子は、天子の代數とその在位年數とのみが注記され、中には三度にわたつて同じ注がつけられている。その程度の注を必要とする讀者ならば、始皇帝に對しても注があるだらうし、楚の昭王は勿論、齊の桓公、晋の文公にも必要であらう。また、彭越に注を與えるのならば、陸賈

・酈食其にも要るし、韓信に相當な注がついている以上、張良・蕭何に説明がないことは片手落ちである。

また、本書が刑法志であるということを意識すれば、この三人のうちでは、韓信よりは九章律を作つた蕭何に注を與えなければならぬ筈であるし、彭越などよりは、傍章十八篇を作つたという叔孫通の方が法制史的に重要な人物である。従つて本書の啓蒙的な半面からいへばなほだ不親切な注だといえる。

一方、學問的な半面からいへば、例えば文帝即位十三年に肉刑を廢止して城旦春刑や答刑にかえる個所などに、漢舊儀その他の関連資料を注記する必要はないだろうか。もつとも、序文によれば、注は、「煩雜な注釋家の諸説を羅列するのをやめて、われわれが最も妥當だと考えた注や解釋を簡明に附記した」とあるから、漢書の諸注についてすらしかりとすれば、いわんや他の資料を注記することは、煩雜をさげるといふ本書の方針にはそわないことであらう。しかし、この個所などは漢の勞働刑を考へるときには必ず問題になるのであり、げんに漢口重國氏の一連の研究があるところであるから、参照論文をあげるのも一法であらうし、それも煩雜とあらば、問題をつけて刑法志の諸問題をあげ文献表を附することもできる。

本書が問題を缺くということは、啓蒙的な面からいつても學問的な面からいつても惜しいことで、これだけの翻譯をされる譯者達の漢書刑法志に對する見識をうかがい得なかつたことは、甚だ残念である。

いまひとつ、私の率直な讀後感をいえば、あれだけ難解な刑法志に對して、一つの譯に統一されたことに驚いたのである。これも序文に若干の個所についての少數者の異見は割愛した旨がしるされて

いることで、本書の性質上やむを得ぬとせねばならぬし、その方針自体が確かに一つのゆき方であるが、私の個人的希望としては、少數意見をもうかがいたかつた。多くの注の中で何故この注をえらぶかということば學問的に重要なことである。最高裁判所の判決には少數意見も公表される。最高のスタッフが集つてなされる譯注であれば、少數意見もまた尊重すべきである。古典の譯注は、意見がわかれる方がむしろ自然なのではあるまいか。そういう少數意見の注記こそ、學問的な一面からの本書の性格を一層高めるものであると信ずる。

仄聞するところによれば、このスタッフはひきつづき晉書刑法志の譯注を始められている由である。今後刑法志のみならず、中國法律史料の翻譯が續刊される事を大いなる期待をもつて鶴首している旨を記し、蕪雜な書評を終えたい。

(大庭 脩)